

# 「祖父と沖縄戦～子どもから大人まで共に考える戦争と平和」

## 牛島貞満

こんにちは。久しぶりに狛江の駅を降りて、すごく懐かしく思いました。牛島です。よろしくお願ひします。(拍手)

沖縄戦のことをご存知の方は牛島満を知っていると思います。

(写真 1) 私はこの下の方ですが、一番最後に赴任したのは大田区の嶺町小学校です。15 年位前に狛江第一小学校で 3 年生と 1 年生の担任をして、そして沖縄戦の特別授業を 6 年生にやらせていただいたと思います。その後で世田谷区、大田区と異動したので、そのうち東京湾に流れちゃうんじゃないかと思っておりましたが、一応大田区で止まりました。

祖父が牛島満、沖縄戦の第 32 軍、沖縄守備隊の司令官でした。

今日は皆さんに問題を出しますので、それに答えられるように用意しておいてください。問題は自分だったらどちらの作戦を取るか、首里で戦うか南部に下がって戦うかということです。

まず、沖縄戦で亡くなった方がどれくらいいるかというと、約 20 万人。これは敵も味方も含めてです。もう少し多いかもしれません。朝鮮半島出身の方々の数字は不明です。沖縄県民でもいつどこで亡くなったかもわからない人がかなりいます。狛江市の人口が 8 月で 8 万 3 千人ということで、かなりの数の方々がたった 6 か月の戦争で亡くなっていることになります。

(写真 2) 今年の慰霊の日に平和の礎に拝みに来た人です。沖縄戦で亡くなった全ての人の名前と沖縄県についてはアジア太平洋戦争で戦没した人の名前が刻銘されています。石版 1 面に日本名であれば 210 人、これが 1220 面あります。「いつどこで亡くなったか分からない? えっ、そんな馬鹿な」と思われるかもしれませんが、ちょっと考えれば東南アジア、朝鮮、中国で亡くなった方々の中には、(骨壺に) 石が入っていたとかという話も聴いていると思います。遺品などが戻っていない方もいますから、侵略していった土地でどの様に亡くなったか分からない方が沢山います。

この平和の礎に刻銘されている 2 人を今日は取りあげます。(資料 A 参照) 1 人は屋宜 和子(や



写真 1



写真 2

ぎ かずこ)さん。もう一人は私の祖父、牛島満です。

【動画のナレーション】：勢いの良かった日本軍も各地で負けはじめ、1944年にはサイパン・グアム・フィリピンなど太平洋地域での支配力を失った。1944年3月、沖縄守備軍として第32軍が編成され、軍事施設のほとんどなかったこの島に飛行場や陣地が次々と作られ、要塞と化していった。沖縄守備軍の牛島司令官は17歳～45歳までの男子を根こそぎ動員し、また男子学生には鉄血勤労隊を組織させ、女子学生は看護要員として動員した。

戦争というものは兵隊さんがやるものと思っていました。…

4月1日、米軍は1300隻の軍艦を並べて、ここ読谷海岸に上陸して来ました。(銃撃の音) 昼も夜も激しい鉄の暴風でした。ありとあらゆる弾丸が天から降ってきました。日本軍の攻撃といえば、夜間の肉弾斬り込み一本やりでした。一番の犠牲者は何といっても年寄りや子どもたちだったんです。あっちこっちで死んだ母親のおっぱいをしゃぶっている赤ちゃんを見掛けましたが、あの子たちはどうなってしまったんでしょうかね。

まず、沖縄戦で亡くなった人の数について約20万人と言いましたが、内訳を見ます。

(写真3) アメリカ軍の死者は12,520、軍人のみです。日本側の死者の場合は兵隊、今の高校生と同じ年齢の学徒隊それから軍属といわれる人、それから住民で18万人、あわせれば約20万人。アメリカ軍は正確な数字ですが、日本側はさらに数が多い可能性が十分にあります。日本側の住民と軍人とに分けるとこのようになります。沖縄戦の特徴として兵隊より住民が多く亡くなったということです。

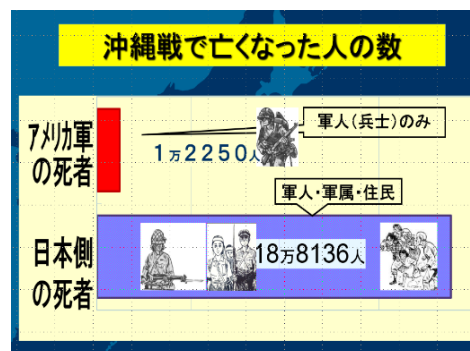


写真3

日本軍とアメリカ軍の戦力を比べてみますと、兵隊の数だけでも11万人と54万人、1:5になります。

沖縄戦のキーワードで良く出てくるのは「鉄の暴風」です。今日はその「鉄の暴風」を持ってきました。戦艦などの艦砲から打ち出された砲弾の破片です。これは、砲弾の先端部分です。持っていただきます。(観客：重いですね)。この鉄の塊がびゅんびゅんとんでくるんです。台風は風ですが、この鉄の塊がびゅんびゅん飛んで来るんです。当たったらどうですか、ひとたまりもないです。今日は全員に触っていただきます。資料館などではガラスケースに入っています。これは本物で、米須小学校(糸満市)の校庭の裏に落ちていたのを子どもたちが「落ちてたよー」と先生に持って来てくれたものを、もらいました。

(写真4) 花火に似ています。ヒューと音がしてドカンと破裂して火花がバチバチと散る。どう違うかというと、火薬を囲んでいる周りが違うんです。花火は周りが紙です。砲弾は周りが尖って割れる鉄になっています。



写真4

ではなんでこんなに住民が亡くなったのかということについて、これから考えていきたいと思います。

平和の礎にあった屋宜和子さん、6か月。お母さんは安里要江(あさと としえ)さんでした。当時25歳で

和子さんと4歳の男の子がいました。安里さんの証言を聞いて下さい。…(PCトラブルで、証言の動画が起動しないので飛ばします。安里証言は ページ参照)

屋宜和子さんは0歳で亡くなりました。沖縄戦について、赤ちゃんには何も権限がありません。ところがもう1人の牛島満は、沖縄戦に関しては最大の権限を持っていた人間でした。どんな人かというと、階級は陸軍中將で、当時57歳でした。実際に会った人に聞いてきました。宮城喜久子さんは元ひめゆりの学徒隊で、津嘉山(南風原町)の壕で祖父に会ったということです。5月27日に壕の中に牛島満が「ご苦労さん、ご苦労さん」と言いながら入ってきて、壕の中の宮城さんのベッドに文庫本が置いてあった。宮城さんは文学少女で『風と共に去りぬ』を読んでいた。アメリカ南北戦争の恋愛小説です。怒られるかなと思っていたが、声を掛けられただけで、とても優しくておじいちゃんみたいな人だったと、おっしゃっていました。

自分の家族、私の父親やおじ、おばに話を聞いても子ども好きで怒らずにやさしい、怒鳴られたことが一度もなかったと言っておりました。いまでこそ家庭内暴力ですとか、中高生の部活だと、たたいただけで大騒ぎになりますが、この当時は悪いことしたら殴られるのは当たり前の中でした。74年前の当時でも怒らなかったようです。お酒が弱くて、ビール1杯飲むと真っ赤になってひっくり返って寝てしまう。私はそこだけが似ています。料理が好きで、釣ってきた魚をさばいて食べさせてくれたりと、そういう父親だったと言っていました。(写真5)真中にいるのが祖父、これが家族。軍服を着てなければ平和な家族の写真です。左端が私の父親です。上の3人の男の子は、士官学校を出ています。



写真5

(写真6)これが第32軍を指揮した将校たちの集合写真で、真中が牛島司令官です。

司令官の役目は、①作戦を決定する②戦争を始める③戦争を終わらせるです。

子どもたちには、こう説明します。作戦を決定するには、論議はしますが多数決ではありません。A案、B案、C案があったとすると、C案が多数を占めても、司令官の意見がA案だったらA案に決定します。大人向けの話では、小学校の行事などを決めるために職員会議があります。狛江第一小学校に来る前までは職員会議でよく多数決を取っていました。しかし、狛江一小に来たころには校長が「私はこれにする」といえば、それで決まる様になってしまいました。それで、「東京の小学校は、旧日本軍化した」と言っています。



写真6

戦争は外交の一手段なので、勝つか、負けるか、もう一つ引き分けというのがあります。大体、戦争は引き分けが多く、今の朝鮮半島も引き分け状態で戦争が終わっていないからトランプさんと金正恩さんが休戦協定から平和協定で、戦争を終わらせると言っています。

第32軍と大本營の関係をみます。第32軍は「持久戦」を上から命じられています。本土決戦のための時間稼ぎですね。絵にして見ました(写真7)。防波堤で守られるのは港の船や人や村で、皇土(本土)です。沖縄は防波堤になる訳で、ここで子どもたちが釣りをしています

が、かわいそうに波でさらわれてしまいます。本土をアメリカ軍という大波から守るためには、防波堤は、波をかぶっても良いという作戦だった。東京に大本営がありました。政府機関、国会、天皇・皇后等の住居があった。これを長野県の松代に移すという大工事が行われました。山の中に、こっそりトンネルを掘って、朝鮮人の労働者を連れてきて、このような碁盤の目のようなトンネルを作っていました。この中に家を建て、政府機関等を入れようとしたわけです。東京湾湾岸要塞の建設です。千葉県館山に、海軍の「震洋」の基地を作りました。



写真7

格納庫を山の中に掘り、そこからジェット・コースターのように海岸までレールを引き、滑り台のようなものを作ります。ベニア板製のモーターボートの先端に爆弾を積んで体当たりをするというものでした。それを作るために時間が必要ということで、できるだけ長く（沖縄で）戦争するということが持久戦だったのです。実はこの作戦を知っていたのはこの写真に写っている沖縄戦を指揮した将校たちだけでした。人たちだけ（写真6）。一般の兵隊も住民もちろん知りません。中国戦線から沖縄に対馬丸で運ばれてきた第62師団の兵士達は、「やっと日本に来た、沖縄を守るんだぞ」と思っていました。しかし、実際には上官からは「住民を守れ」という命令は一切なかったのです。

そうは言っても何で住民の犠牲が多くなったかという疑問はまだ解けません。そこで、日本軍の2つの作戦から考えてみたいと思います。

アメリカ軍が4月1日上陸します。ここに二つの飛行場があります。上は読谷飛行場、下は今の嘉手納基地になっています。持久戦ですから、第32軍は攻撃せずに、直ぐに占領されてしまいます。日米の戦力比で言うと、日本が1発撃つとアメリカは100発ぐらい返してくる状態でした。日本軍の最初の1発の大砲は当たっても、アメリカ軍側には打った場所が分かりますのでそこがやられてしまいます。米軍上陸時は、第32軍は攻撃しなかった。ただし日本軍全体としては、無血上陸を考えていた訳ではありません。鹿児島や台湾から特攻機を飛ばしてやっつけると言うことになっていたのですが、配備が遅れたそうです。実際にアメリカ軍が上陸したのは4月1日、特攻機が飛んできたのは4月5日。

直ぐに上陸をされたので、大本営からは第32軍に対して「攻勢に出なさい。飛行場を奪い返し、敵を出血させよ」という命令が4月3日に出ます。事実上、持久戦の撤回＝攻勢命令が出されたわけです。

【動画ナレーション】4月1日午前8時前、上陸部隊は第1陣が陸地へと向かった。しかしこの日、日本軍から抵抗らしい抵抗はなかった。…住民の側も捕まったら殺されるどころか食べ物を与えてくれるアメリカ軍に対して驚きを禁じ得なかった。日本軍によって建設されていた読谷飛行場、嘉手納飛行場は補修・拡張されて米軍基地となった。

お配りした資料Cを見てください。今米軍が、撮影したフィルムで、読谷海岸から上陸する様子を見ていただいたのですが、翌日東京で発行された新聞にはどのように報道されていたでしょうか。4月2日付の朝日新聞だけでなく、読賣報知も毎日新聞も全部記事内容は同じです。大本営発表として「撃沈、航空母艦1隻」アメリカの航空母艦1隻を沈めたというんです。フィルムでは、沈んでいましたか？米兵は、海岸をゆうゆうと歩いて上陸していました。日本の

特攻機が飛んでいるような、様子は見られませんでした。我々の世代は大本營発表というのは分かりますが、若い世代は良く分かりません。「我陸上部隊果敢の邀撃(ようげき=迎え撃つ)」と書いてありますが、攻撃してましたか？全然してないですよ。4月3日も同じです。4月1日前後に特攻機が6回飛んできたと書いてあります。現地沖縄で発行された「沖縄新報」という新聞があります。4月4日付で、大本營発表で、「撃沈破 三十一隻」「壮烈な挺身斬込み戦」「一日朝来、沖縄本島に上陸を開始した敵は我が地上部隊の…壮烈な挺身斬込み戦をかけて敵陣営を震え上がらせた」と書かれています。

こういう情報が私たち東京にも沖縄でも出されていました。

【動画の続き、ナレーション】米軍戦車に対しては日本軍の砲弾が正確に命中した。…。砲火を潜り抜けてきた戦車には日本兵が爆薬を抱えて待ちうけ、戦車もろとも自爆した。いわゆる肉弾戦法である。こうした肉弾戦には防衛隊や鉄血勤皇隊なども選ばれた。大名(おおな)を中心とした第3の防衛ライン、わずか3kmあまりの地域で40日間もの間、激しい攻防戦が繰り返されたのである。アメリカ軍の死者・行方不明者、およそ5千人。5月末までの首里戦線での日本兵の戦死者はおよそ6万4千人。一方、捕虜になったのは200人余りであった。



写真8

(写真8) 首里の司令部壕です。首里城の下にあります。この部分は74年前の状態を保っています。現在は、非公開になっていて、多分見るのは初めてだと思います。

これまでの激しい戦闘での日米双方に犠牲者が出ています。米軍戦車が大破していました。ここまでは読谷海岸から首里まで、首里戦線と言いますが、兵士同士の戦いです。アメリカ軍の戦死者(行方不明者を含む)は約5千人、日本軍の戦死者は6万4千人。約10倍です。ア

メリカ軍は残り53万5千人、日本軍の兵力は4万6千人。ただし、4万6千人の中には負傷兵が入っています。

さて、ここで問題です。5月21日、首里の地下司令部壕で作戦会議がありました。このように米軍に追い詰められた状態で、自分だったらどちらの作戦を取りますか。

- ①首里でそのまま闘う
- ②南部に下がって戦う

こういう集会ですと、「私はすぐに降参する」という方がいらっしゃるのですが、今日はあえて①か②かを取るとすればどっちかなと決めて下さい。必ずしもベストの選択が私たちの周りにあるとは限りません。よりベターな作戦を選んでください。①は北からアメリカ軍が攻めてきました。首里の司令部の近くまで米軍が来ましたが、このまま闘い続ける。条件としては周りには洞窟陣地がいっぱいあり、食料も1か月分位は確保されています。武器・弾薬もあります。②はアメリカ軍が攻めてきました。司令部を南の摩文仁に移します。日本軍もあわせて下がります。では考えて下さい。…。

では聞きます。①首里でそのまま闘う。手を挙げて下さい。2/3位ですかね。②南部に下がって戦う。ありがとうございます。

実際には、第 32 軍は②を選択しました。翌日の 5 月 22 日に、南部に下がって戦う＝「南部撤退」の命令を出しました。あえて言いますが、②を選んだ方は軍中心の考え方です。作戦上、敵から遠くに行き、作戦を立て直す。持久戦という規定方針に従う考え方です。現実には②を第 32 軍は選択しました。①は住民のことを中心に考えての選択です。何故、①の作戦が住民にとって良かったか、②を選んだことで、どんなことが起きたのかを、0 歳で亡くなった和子さんのお母さんの安里さんの証言から聞いていただきたいと思います。(資料 B 参照)

【安里要江さんの証言】字幕「どうして疎開しないで、日本軍についていったのですか」中国の方から沖縄に日本軍が駐屯することになっていたわけです。「沖縄を守りに来た。あ、良かった。助ける人が来た」という感じでした。沖縄兵隊が入ってくると「良かったね、沖縄守ってくれるんだね」と。「兵隊がここ(沖縄)に来ると言うことは、敵が来ないということ」。「アメリカの兵隊に捕虜になってしまったらだめだって、一番怖かったですね。あの時は日本兵よりもアメリカ兵が」。「上陸してきて、(アメリカ軍の捕虜になると女は)暴行を受けるとか、子どもたちは股裂きにするとか、男は戦車の下敷きにするんだとか」、こういうことしか私たちは教えられていません。この恐怖で、逃げよう。…。

字幕「沖縄戦が始まって、日本軍は、住民をどうしましたか」

沖縄戦が展開され、3 月 23 日の艦砲射撃が始まった時に一番頼りにしたのは兵隊だったんです。一番頼りにしていた兵隊が、陣地で指揮していないですね。どこに動きなさいとこういうことはあまりなかったです。…。

字幕「安里さんの逃げたルート。4 月 1 日、アメリカ軍、読谷海岸に上陸。和子ちゃんら家族、親戚 20 人で南へ逃げる」「4 月 29 日、アメリカ軍、南下。途中で艦砲の周知有攻撃に合う」「6 月 1 日、艦砲の飛び交う中、さらに逃げるが壕に入れない」。「次々と家族が亡くなる」「道には遺体が転がっている」

どこか空いている防空壕はないか、石穴がないか、自然のガマがないか、探し求めてやっとの思いで、姉が「壕らしきものが見えるよ、要江さん」。(壕の近くまで)行ったところがね、日本の軍隊、怖いと思わなかったから。気安く助けてもらえるという意味でその前に私たちは、立ちほだかった。中から鉄兜をかぶって軍服を付けた、軍靴をはいて、パッと出てきたのね。「お願いします。この子たちだけでも良いから、この防空壕の中に避難させて下さいませんか」と言い終わらないうちに、「バカ野郎」です。「バカ野郎。君たちが(※安里さんたちを指す)このようにここに居るからこそ、戦争はこのようになっている」。如何にもじゃまだ、邪魔とは言いませんよ。「君たちがこのように追い込まれている(※住民がここにいるからの意味)から、戦争はこのような(日本軍が追い詰められている)状態になっているんだぞ。出ていけ、出ていけ」。これをずーっと連発したの、私たちに。

これがね、出ていけなら良いですよ。「そこに立っていたら、敵の電波探知機に探知されて集中攻撃を食らうよ」とこの言葉がなんか私たちの、信じられないです。あれほど私たちが頼りにしていた日本の兵隊、友軍なのになんでこんなことになっちゃたかな。涙も出ない。悔しさだけが一杯だったわけです。

字幕「やっと入れた轟(とどろき)の壕で、どんなことがありましたか?」

轟の壕の中は天井が高く、立っても上をつかむことができにくい。ガマが空いていたんですよ。とにかくその中に入ったら、入口に居たおじいちゃんに「そこには友軍がおりませんか」と聞きました。おじいさんは「いるよ、いるよ。中に入ったら右側に

横穴があるから、そこに入ったら日本の軍隊がいるから、そこを通るときはそーっと通りなさい、静かに通りなさい」って、教えてくれた。

でも中でも友軍は、悪いことしましたよ。友軍が着剣をしてみんなの前まで来て、ガチャガチャと壁に音をたてるようにして、「沖縄の皆さん、子どもを泣かすな。子どもを泣かすと殺してやるぞ」。それが一番の恐ろしさ。だから子どもたちに「泣かないでよ、泣かないでよ」。あれでも兵隊とは言わないよ。私たちは、さん付けです。「兵隊さんに殺されるから」。

和子ちゃんも戦場の中を駆け回るときは背中におぶって、ひた走りに走ってここまで来ましたけれど、やっぱり壕の中に入ったら、落ち着いて子どもを抱っこする時間があるので、全て抱きしめていました。肌身離さず。この子だけは守らなければいけないと。そして、乳房を口に当てても冷たい感じがしたのがびっくりでした。(私の母乳が出なくなったので、)みるみるうちに和子ちゃんは(弱っていき)ガマの中で餓死なんです。6月16日位だと思いますが、1点の明かりもない中で和子ちゃん、私の手のひらの中で息を引き取る、苦しかったですね。

でも、まさかアメリカの兵隊がここまで来て、私たちを捕虜にする、救出するということは夢にも思っていませんでした。

(1945年6月、轟の壕から、住民がでて、米軍が見守りながら救出するシーン)

字幕「安里さんたちは、こうしてアメリカ軍に救出された。」

(糸満市摩文仁・平和祈念公園 空撮シーン、平和の礎)

字幕「安里さんの家族は、和子ちゃん(8か月)死亡、夫・宣侑(せんゆう)さん(27歳)收容所で8月12日死亡、宜秀ちゃん(4歳)收容所で10月1日に死亡。一緒に逃げた20人の内11人が死亡した。」

胸がつまるようなお話なんです、安里さんは、軍隊は住民を守らなかった、とおっしゃっています。なぜそんなことになったのかということです。日本軍の作戦と配置図から考えてみたいと思います。①であった場合は、日本軍が当時の言葉で言えば玉砕をすれば、南側にいた住民は、日本軍が負ければアメリカ軍の捕虜になる。結果として、捕虜になればひどい殺され方をされると言われていたわけですが、それを信じていた人も捕虜になれば食糧を与えられ、住居を与えられたわけです。②の南部に下がってということになりますと、安里さんが話をされていたように、日本軍と住民とアメリカ軍が混在する戦場になってしまった。イメージ分かりますね。赤ちゃんがぎゃあぎゃあ泣くと、近くにいるアメリカ軍に見つかってしまう。だから「泣かすな！」と脅された、となるわけです。したがって南部撤退の通り道であった、長嶺小学校(豊見城市)で授業をさせてもらいましたが、70%の人が6月に亡くなっています。

南部撤退による犠牲についていうと、住民虐殺は、「もうこんな戦争嫌だ！」といって住民が投降しようとする、日本兵は、



写真9

米軍に自分たちの居場所が見つかってしまうから、と日本兵が後ろから住民を鉄砲で撃つということが起きたのです。

強制集団死、いわゆる「集団自決」と言われるものですが、安里さんの証言にあるようにアメリカ軍の捕虜になりひどい殺され方をするぐらいなら自分たちで死んだ方がましだ」と考えて親子殺しをするというようなことが起きたのでした。

壕の追い出し。日本軍がここを作戦に使うからと言って、住民が避難していた壕から日本軍が住民を追い出したのです。追い出されたらどうですか。先ほどの鉄の塊がびゅんびゅん飛んでくるんですよ。壕を一步出たら、命があるかないか、命の危険が極めて高まること分かります。

これは住民だけでなく、日本軍の兵士にとっても過酷な命令でした。「生きて虜囚の辱めを受けるな」(戦陣訓)。生きて敵の捕虜になることは、日本軍の兵士としてとても恥ずかしいことであるとの日本軍の規律(行動規範)がありました。そのことによって負傷していた日本兵は手りゅう弾を渡される、あるいは青酸カリを飲まされる、注射される、と言うように、日本軍による仲間の兵士の虐殺が起きました。南部撤退は、沖縄の梅雨によって成功しました。しかし、実際に南部に下がった兵士たちは敗残兵状態でした。軍の規律を守りながらも「南部撤退」とは別の選択肢はなかったのでしょうか。

もう一つ命令があります。この後6月18日、「最後まで敢闘し、悠久の大義に生くべし」という命令が出されます。「悠久の大義」というのは日本書紀に出てくる“天皇のために生きることとはとても尊いことだ”という意味合いです。「最後まで敢闘し」は頑張りなさいという意味で、相撲の敢闘賞と同じ意味ですね。もう司令部の命令で戦うのは困難なので、バラバラになっている兵隊たちが、階級の上の者が指揮をし、最後の一人まで戦えという命令が出されました。その4日後の6月22日に牛島満は自決をしています。23日ではなく22日です。時間がないので詳しいことは省きます。

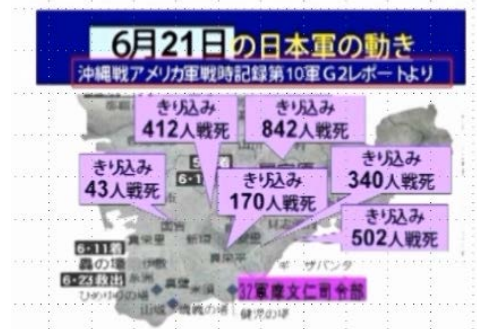


写真10

ではそれによって沖縄戦はいつ終わったのでしょうか。

6月21日、何百人という単位で切り込みが行なわれています。

この数字はかなり正確です。アメリカ兵が日本兵の死体を一つひとつ数えて、部隊に報告した数字を集計したものです。23日もそうです。24日もそうです。7月8日もそうです。9月5日もそうです。

あれ！沖縄戦というのは本土防衛の時間稼ぎの戦いだったのではないですか。8月15日を過ぎてます。やっと9月7日に嘉手納基地で降伏調印式をしました。(写真11) 納見中将というのは宮古島の部隊の司令官です。ここはアメリカ軍が上陸しませんでした。部隊全体で投降しています。日本軍が降伏したのは9月7日です。実は停戦命令を出す、武装解除を出す立場の人＝牛島満司令官が死んでしまった、自死してしまったことによって、「終わりなき沖縄戦」が作られました。“戦陣訓”によって無意味な切り込みが多発したわけです。証拠があります。これは牛島満の直筆です。(訓令 陸軍

沖縄の日本軍(第32軍)が降伏した日 → 9月7日



1945年9月7日嘉手納飛行場にて、納見中将(宮古島)が降伏調印

写真11



大尉益永薫 貴官ハ千早隊ヲ指揮シ軍ノ組織的戦闘終了後ニ於ケル沖縄本島ノ遊撃戦ニ任スヘシ 昭和二十年六月十八日 第三十二軍司令官牛島満)

最後に、沖縄の小学校で授業をしたので、その時の聴き取りを聞いて下さい。

【祖父母の沖縄戦体験聴き取り発表】①当時、おばあちゃんは私より 1 つ下の 10 歳だったそうです。でも、子どもの世話はおばあちゃんがしていました。戦争が激しくなっておばあちゃんは、当時 1 歳の自分の弟をおんぶしながらいろいろと逃げ回り、防空壕をやっと見つけ、防空壕に隠れました。そしておんぶしていた 1 歳の弟を背中からおろしてみると顔が無くなっていて、下半身だけが合ったそうです。

②私のおじいちゃんは沖縄戦を体験した。その時はどんな様子なのか全く教えてくれない。おじいちゃんは嫌だ、絶対に教えないと、厳しい表情でそういった。おじいちゃんはいま 80 歳。どうして教えてくれないのか分からない。もしかして戦争の時にとっても苦しいことがあったのかな。お父さんもお母さんも知らなくて、おじいちゃんはとにかく厳しい表情で言った。おじいちゃんは辛い思い出があるかもしれないので絶対戦争を起こしたくない。

2 人目の女の子は T さんという真面目そうな女の子でした。いつも遊んでくれる優しいおじいちゃんに宿題だから教えてと言っても、涙をためて絶対に教えないと言われたことを発表しています。安里さんのように辛い体験をお話されている方もいらっしゃいますが、自分の家族にも言えないような辛い体験をした人がたくさんいるんだと言うことが、この発表から分かります。

1 人目の女の子は、O さんです。授業の 6 年後に会いに行きました。高校生になっていました。O さんのおばあちゃんにお話を聞きました。最初は 1 歳の弟をおばあちゃんがおんぶしていました。おばあちゃんが砲弾で、次にお母さんも砲弾で、亡くなりました。仕方がないのでお母さんからおんぶひもを取って、当時 10 歳のおばあちゃんが、おんぶして必死で逃げたそうです。発表では、防空壕と言っていたのですが、大きな木の下に着いたので、やれやれと思って弟を降ろそうとしたら上半身がなかったということでした。実はここ（頭の後ろ 30 cm）を通ったのです。30cm 手前を通っていたら、この当時 10 歳の O さんのおばあちゃんも即死です。おばあちゃんの脇の下や背中には鉄の小さな破片がいまだに体にあるそうです。人が住んでいるところで戦争が起きると言うことはこういうことなんです。生きるか死ぬかは紙一重です。

私なりの沖縄戦から学ぶことをまとめます。①軍隊は住民を守らない。②住宅地域で戦争が起きると孫子の代まで傷を残す。それは身体の傷だけでなく、心の傷もです。③戦争は人を変える。牛島満はやさしい人だと、言われていました。しかし、沖縄の子どもたちや学徒隊、住民の人たちが犠牲になることを知っていて南部撤退を、あるいは最後まで敢闘しろと命令を出しました。こんなことがあるぐらいなら、多少問題があっても国と国との意見の相違は知恵で、対話で解決すべきだというのが沖縄戦の教訓です。

第 32 軍が出した命令、この過酷な命令は私の祖父が出したものです。この命令によって住民および兵士の犠牲を著しく増やしました。本当に軍隊としても他の選択肢はなかったのかと思います。大本営と第 32 軍の間の電報綴りなどを調べた結果は、南部撤退は大本営からの直接の命令ではありません。一切そういう電報のやり取りはありません。第 32 軍独自の判断であることがわかります。

私の祖父は最後に辞世の句を読んでいます。「秋待たで枯れゆく島の青草は皇國(みくに)の春

によみがえらなむ」。島の青草というのは島の若者のことを言っています。今は夏です。秋になる前に枯れて死んでしまった若者の命、魂が春によみがえるであろうという句です。秋の次は冬。冬は本土決戦を意味し、アメリカ軍が本土に上陸をしようとしたが、日本の守りが堅く、アメリカ軍が諦めて停戦を結ぶという状態が春です。「皇國の春」が訪れた時に、沖縄戦で亡くなった若者の魂が甦るだろうと詠ったのです。そうした本土(皇土)防衛のための犠牲だったら仕方がないと思い、この2つの命令を出したのではないかと思います。この句からは、牛島は、本土決戦が必ずあると思っています。よもや自分の自決の2か月も満たない時期に大日本帝国が連合国に降伏するとは思ってもみなかったでしょう。国際情勢の読みも、何を大事にするかの判断も違ってきます。人柄がやさしいという人が必ずしも住民や国民にとって良い人とは限らないわけです。

米軍は当初1945年9月には本土上陸を予定していました。沖縄戦の後、鹿児島か東京湾に上陸する計画を立てていました。沖縄戦では4人に1人が亡くなっています。同じことをやろうと大本営は考えていた。もし9月まで連合軍との戦争が続いていたら、この中の4人に1人はこの世に存在しないということになります。Oさんのおばあちゃんが死んでしまったなら、おばあちゃんから生まれたOさんのお母さんは、存在しない。そのお母さんから生まれたOさんは現在、存在しないのです。関東地方のこの粕江地域でも、沖縄戦と同じことが起きたらこの中の4分の1はこの世に存在すらしなかったということになると思います。今ここの会場にいるひとり一人のかけがえのない命が存在しなかったかもしれません。

時間を超過し、かつPCがトラブルを起こしてしまいましたが、これで私の話を終わらせていただきます。ありがとうございました。(拍手)